

日本大学の現況と課題

—全学自己点検・評価報告書2015—

(大学・短期大学部・専門学校)

点検・評価結果及び改善意見

【生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科】

目 次

基準Ⅰ	理念・目的	- 1 -
基準Ⅱ	教育研究組織	- 4 -
基準Ⅲ	教員・教員組織	- 6 -
基準Ⅳ	教育内容・方法・成果	- 12 -
IV-1	教育目標，学位授与方針，教育課程の編成・実施方針	- 12 -
IV-2	教育課程・教育内容	- 17 -
IV-3	教育方法	- 21 -
IV-4	成果	- 25 -
基準Ⅴ	学生の受け入れ	- 28 -
基準Ⅵ	学生支援	- 32 -
基準Ⅶ	教育研究等環境	- 36 -
基準Ⅷ	社会連携・社会貢献	- 41 -
基準Ⅸ	管理運営・財務	- 44 -
IX-1	管理・運営	- 44 -
IX-2	財務	- 46 -
基準Ⅹ	内部質保証	- 48 -
重点項目1	修学継続支援，学修意欲の喚起	- 51 -
重点項目2	国際交流	- 53 -

基準Ⅰ 理念・目的

1. 現状の説明

1 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。

[評価の視点]

- ・ 大学の理念・目的，及びそれに基づく学部・研究科等の理念・目的の明確化
- ・ 個性や特徴の確立化
- ・ 大学の教育理念「自主創造」の能力を持つ人材の育成

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、生物すなわち動物・植物・微生物とそれらに由来する生物資源や自然環境に係わる教育研究を行う学部として、「生産・利用科学」「生命科学」「環境科学」の3本柱と、それらを取り巻く人間活動を教育の基本理念とし、21世紀の諸問題に対処していく科学技術と人材を幅広く育成することを目的としており、理念・目的とも明確化している。そして、教育方法では、講義科目と同名の実験・実習科目を配置して、一人ひとりが体験によって理念を修得できるような授業体系（フィールドサイエンス教育という）をとっており、この授業体系は、多様な学生への対応が可能な体系である。

多数の学生が同時にしかも一斉に聴く講義と異なり、実験・実習は一人ひとりの創意工夫が必要であり、本学部の「フィールドサイエンス教育」によって、自主創造の能力開発を行っている（資料1-1, 1-2）。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、研究テーマである「動物や植物，また微生物を含めた生命ある全てものの利用とその生産，それらの営みに起因する環境負荷の低減と環境修復」を解決することを目的とし、研究の目的別に生物資源の生産科学専攻，利用科学専攻，生命科学専攻，環境科学専攻，経済学専攻の5専攻で構成されている。これによって、研究の対象別に分散しがちであった知識や技術を集約し、効率の高い研究手法を用いることが可能となっているなど、理念・目的とも明確化している。生物資源科学部11学科からも前述の5専攻のいずれにも進学が可能となっており、多様な学生への対応が可能となっている。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では、獣医学専攻の下で犬や猫などの家庭動物，牛，豚や鶏などの生産動物の疾病の診断，治療や予防，ヒトと動物の共通感染症の解明と予防，さらには野生動物や水棲動物の生態，形態や機能の解明などを主な研究テーマとしている。これらの研究課題を通して優れた知識や技術を有する臨床獣医師や専門家の養成を目的としており、適切である（資料1-1, 1-2）。

2 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員（教職員及び学生）に周知され、社会に公表されているか。
--

[評価の視点]

- ・ 構成員に対する周知方法と有効性
- ・ 社会への公表方法

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、理念・目的は、可能な限りの媒体を使って周知を図っている。まず、学生及び教職員個人に配布する学部要覧、毎年配布する学生手帳に明記して、毎年度始めに実施するガイダンス時に教員によって説明を行い周知している。また、学部ホームページの冒頭に学部長挨拶とともに教育コンセプトとして記載し、学生・教職員にはもちろんのこと、社会への周知も行っている。

また、学部ホームページの「教育情報」には、学科ごとに教育研究上の目的を明示して周知を図っている（資料1-3, 1-4）。

さらに、受験生用の「生物資源科学部ガイドブック」にも教育理念・目的を明記して受験生や保護者に対する周知を行っている。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、理念・目的は、可能な限りの媒体を使って周知を図っている。まず、大学院学生及び教職員個人に配布する大学院要覧、大学院ガイドブック明記して周知を図っている。また、毎年7月中下旬に実施する大学院説明会で、5つの専攻の専攻主任が各専攻の理念・目標及び専攻の内容などを説明し、周知している。また、学部ホームページの大学院のページに研究科及び専攻ごとに理念・目標を掲載して大学院学生・教職員とともに社会への周知も行っている。

また、学部ホームページの「教育情報」には、研究科と専攻ごとに教育研究上の目的を明示して周知を図っている（資料1-3, 1-4）。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

3 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。

[評価の視点]

- ・ 理念・目的を検証する責任主体、検証体制・方法

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、組織による定期的な検証は行っていない。しかし、毎年実施している新入生による「就職する場合の希望業種」アンケート調査の結果から、学科別の希望業種と学部・学科の教育コンセプトの整合性が検証できる。それによるとミスマッチが少なく、理念・目的の適切性は妥当と評価される。

〈2〉生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学研究科，獣医学研究科では、組織による定期的な検証は行っていない。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、教育理念や目標の周知は、媒体や方法が適正であり、在学生や社会に正しく周知されている。

〈2〉生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学研究科，獣医学研究科とも，特になし。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、各学科はカリキュラム改正後の完成年度の前年から、カリキュラム改正後の検証と次期カリキュラムへ向けての検討を実施しており、その内容の検証と共に学部の教育理念や目標との整合性、あるいは受験生の希望や社会的ニーズとの整合性を検討し、それを教育に反映させている。

4. 根拠資料

1-1 学部要覧 p. 6～7

1-2 学生手帳 p. 103～104

1-3 生物資源科学部ガイドブック p. 3

1-4 学部ホームページ

教育研究コンセプト (<http://www.brs.nihon-u.ac.jp/about/concept.html>)

学部長挨拶 (<http://www.brs.nihon-u.ac.jp/about/message.html>)

教育情報 (<http://www.brs.nihon-u.ac.jp/about/policy/>)

基準Ⅱ 教育研究組織

1. 現状の説明

1 大学の学部・学科・研究科・専攻及び附置研究所・センター等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか。

[評価の視点]

- ・ 教育研究組織の編制原理
- ・ 理念・目的との適合性
- ・ 学術の進展や社会の要請との適合性

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、学部の基本教育コンセプトである「生産・利用科学」「生命科学」「環境科学」の3本柱とそれらを取り巻く人間活動について、講義科目と同名の実験・実習科目を配置して、人ひとりが体験によって理念を修得できるような授業体系、すなわちフィールドサイエンス教育を実施することを教育研究組織編制の原理としている。

大学の教育は、新しい研究に裏付けられたものでなければならず、常に学術の発展や社会的な要請に即応できるように下記の教育研究機関を設立して対応を行っている。

平成10年	生命科学研究センター設立	(生命科学分野)
平成13年	生物環境科学研究センター設立	(環境科学分野)
平成14年	海洋生物資源教育研究センター設立	(生産科学分野)
平成16年	動物医科学研究センター設立	(獣医学分野)
平成22年	先端食機能研究センター設立	(利用科学分野)

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、「生物資源生産科学専攻」「生物資源利用科学専攻」「応用生命科学専攻」「生物環境科学研究専攻」及び「生物資源経済学専攻」の5専攻で構成されており、おのおのの専攻には、教員と大学院学生が共同で研究教育を行う施設として下記の施設を設置して、教育研究を充実させている。

生物資源生産科学専攻	—	農場・牧場・演習林，海洋生物資源教育研究センター
生物資源利用科学専攻	—	食品加工実習センター，先端食機能研究センター
応用生命科学専攻	—	生命科学研究所
生物環境科学専攻	—	生物環境科学研究センター
生物資源経済学専攻	—	国際地域研究所

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では、最近の最重要課題である人獣共通感染症の研究を中心とする教員と大学院学生が共同研究するための研究施設である「動物医科学研究センター」を設置して、教育研究を充実させている。

2 教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか。

[評価の視点]

- ・ 教育研究組織を検証する委員会等の設置状況，運営状況

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部の委員会の一つに教育組織検討委員会が設置されており，教育研究体制の適切性について検討を行っている。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では，生物資源科学部に設置されている教育組織検討委員会の大学院部会において，教育研究体制の適切性について検討を行っている。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科は，生物資源科学研究科を参照。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，学部の教学理念・目的を達成するために比較的多くの委員会が設置されているが，実情に則し，廃止した委員会が27年度には3つある。現在，設置されている区分1，2，3の各委員会は，各学科からの意見集約をする目的でおおむね良好に機能している。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では，学部委員会での検討により多くの学部教員が，学部のみならず大学院についての共通意識を共有できる。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科は，生物資源科学研究科を参照。

2 改善すべき事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，委員会数が多く，教員に過度の負担を強いているため，さらなる委員会数の減少が必須である。

3. 将来に向けた発展方策

1 改善すべき事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部は，委員会数及び1委員会あたりの委員数の減少による教員負担の軽減。

基準Ⅲ 教員・教員組織

1. 現状の説明

1 大学として求める教員像及び教員組織の編制方針を明確に定めているか。

[評価の視点]

- ・ 教員に求める能力・資質等の明確化
- ・ 教員構成の明確化，編成方針の共有方法
- ・ 教員の組織的な連携体制と教育研究に係る責任の所在の明確化

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、学部の教育研究理念を十分に理解し、社会的要請の高い教育内容と高度で、多様性に富んだ研究への対応しうる人材であって、新たに出現する多岐にわたる課題に対して柔軟に対応できる教員を求めている。設置基準上の学部教員数は、教授92名，准教授・専任講師・助教91名の183名である。現在の教員数は、教授123名，准教授・専任講師・助教140名の263名（2015年5月1日現在）であって、設置基準に対して約1.43倍となっており、適正数を確保している。各学科は、研究室単位又はコースごとに主要学科目を配置している。主要学科目の授業は主に教授（一部准教授）が担当し、関連科目を准教授・専任講師・助教が担当して分野ごとの教育に対して密な連携のもとに責任性を保っている。総合教育科目は、22名の教授，17名の准教授・専任講師・助教が、それぞれの科目を担当し、専門教育と連携を図っている。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、教員に求められる能力・資質等は、「日本大学生物資源科学部教員の採用，昇格及び再任に関する内規」にしたがって研究業績，教育実績，経歴，人物等をもとに総合的に判定するが、教員は、博士の学位を必須としている。本研究科は、5専攻から構成されており、いずれの専攻も設置基準を超える十分な数の教員が配属されている。専攻内におかれる分野は、○合教授と科目担当の准教授・専任講師等で構成されており、密な連携の下に、教育研究を進めている。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では、教員は、教育研究の目的に沿って選考しており、採用・昇格に当たっては本学所定の審査基準に則して厳正・公平な審査を行っている。担当教員は、博士の学位を持つことを必須としている。特に業績は、学部内規より高い基準を設けている。大学院設置基準の8名を満たす教員29名が配置されている。教員の日常的な教育・研究活動を恒常的に評価し、活性化を図っている。研究活動の評価方法には、研究者の科研費の申請・採択，外部資金の獲得，研究業績（発表論文数）などを勘案している。

2 学部・研究科等の教育課程に相応しい教員組織を整備しているか。

[評価の視点]

- ・ 編制方針に沿った教員組織の整備

- ・ 法令に定める必要専任教員数の確保，年齢構成バランスの適切性
- ・ 授業科目と担当教員の適合性を判断する仕組みの整備
- ・ 研究科担当教員の資格の明確化と適正配置（修士，博士，専門職）

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，本学部における各学科の教員定員は助手を含めて，いずれも20名（獣医学科は54名）で，それぞれの学科の専門性に対応して少なくとも6以上の研究室に所属し，有機的に協力して教育研究を行っている。生物資源科学関連の各学科の設置基準上の定員は，教授5名，准教授・専任講師・助教5名で，各学科ともに基準を満たしている。獣医学科の設置基準上の定員は，教授11名，准教授・専任講師・助教11名の22名であるが，現在教授22名，准教授・専任講師・助教20名の42名と9名の助手で構成されている。授業科目担当者の決定システムは，まず，各学科において研究業績及び専門性等を勘案し，学科教授の署名捺印の上学科主任の申請により教授会で審議の上，学長が決定する。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では，5専攻から構成されており，さらに専門ごとに，各専攻は4～5の分野に細分化されている。各専攻には設置基準を満たす適正な数の大学院有資格教員が配置されている。研究科教員は，専攻・分野にふさわしい研究業績，学会活動等の有無について〇合教授全員で審査を行って，授業科目と適合性を判断し，最終的には，分科委員会において承認を経て，学長が決定する。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では，1専攻，6分野から構成されており，それぞれの分野に適正な数の大学院有資格教員が配置されている。研究科教員は，分野にふさわしい研究業績，学会活動等の有無について〇合教授全員で審査を行って，授業科目と適合性を判断し，最終的には，分科委員会において承認を経て，学長が決定される。

3 教員の募集・採用・昇格は適切に行われているか。

[評価の視点]

- ・ 教員の募集・採用・昇格等に関する規程及び手続きの明確化
- ・ 規程，内規等に従った適切な教員人事
- ・ 本学の教育者・研究者としての適性を図るための審査・選考

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，「生物資源科学部日本大学生物資源科学部教員の採用，昇格及び再任に関する内規」に準じてすべての人事は行われている。採用，昇格及び再任は，学科教授の署名捺印の申請書を学科主任が学部に提出する。申請書をもとに人事委員会で協議し，適格と認められたものは，さらに学部長と人事委員会の面接を経て，教授会で審議の上，学長が決定する。日本大学の教育者・研究者として適格性については，学部長・人事委員会の面接において十分に審査されるとともに，学部長より本学における教育の理念「自主創造」について，訓示される（資料3-1）。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、各専攻の〇合教授によって、候補者の大学院担当教員としての適格性について、研究業績、教育実績、経歴、人物等をもとに総合的に判定する。これらの基準は、日本大学生物資源科学部教員の採用、昇格及び再任に関する内規にしたがっており、適格者については、人事委員会、執行部会、大学院分科委員会の承認を経て決定される。日本大学の教育者・研究者として適格性は、学部長・人事委員会の面接で確認するとともに、学部長より大学院研究科教員としての教育研究のあり方を訓示している。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では、〇合教授によって、当該教員の研究教育分野とその配置、大学院担当教員としての適格性について、候補者の研究業績、教育実績、経歴、人物等をもとに総合的に判定する。これらの基準は、基本的には、日本大学生物資源科学部教員の採用、昇格及び再任に関する内規に順じているが、業績については、内規を上回る基準を用いている。適格者は、人事委員会、執行部会、大学院分科委員会の承認を経て学長が決定する。日本大学の教育者・研究者として適格性は、学部長・人事委員会の面接で確認するとともに、学部長より大学院研究科教員としての教育研究のあり方を訓示している（資料3-2）。

4 教員の資質の向上を図るための方策を講じているか。

[評価の視点]

- ・ 教員の教育・研究，学内運営，社会貢献等の活動状況に対する評価の実施
- ・ ファカルティ・ディベロップメント（FD）の実施状況と有効性

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、学部として教員の教育研究活動等の組織的な評価を行うことが必要であると認識しているが、現在のところ、実施に至っていない。しかし、全ての教員は各自「研究者情報システム」に研究活動について登録しており、その内容は、全学期末監査や大学基準協会の監査の際に使用される。

一方、学生による教員の授業評価は授業アンケートにより実施し、数値化した結果を教員へフィードバックし、教員自身による評価の資料としている。また、日本技術者教育認定機構認定のJABEE資格（修習技術者）修得のためのコースが設けられている学科（海洋生物資源科学科と生物環境工学科）では、ベストティーチャー賞を設け教育活動の評価の1つとしている。さらに、多くの学科では、学生の成績から就職までの分析や教育方法等について、専任教員、兼任教員及び非常勤教員を含めた学科教育懇談会にて論を交わしている。

学部全体としての教員の資質向上を図るための方策としては、日本大学FD推進センターと一体になって学部のFD活動を積極的に推進することにある。日本大学FD推進センターより発行のLearning guideを全教員に配布するとともに、日本大学FD Newsletterを全教員へ周知徹底した。学部独自のFD活動をより効果的に実践するために、学内外の講師を招いてFD講演会を複数回実施している。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、研究科独自のFD活動は行っていないが、学部、短大及び獣医学研究科一体となり教員の資質の向上を図っている。日本大学FD推進センターより発行のLearning guideを全教員に配布するとともに、日本大学FD Newsletterを全教員へ周知徹底した。FD活動としては有効的には機能しているとはいえないため、FD講演会を全教職員向けに開催予定であり、学外及び日本大学としてのFD活動の取組みについて、教員の意識を高めることを行う。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、女性教員が3年間で15名増加し助手を含めて79名となった。当学部においては、助手を含めると全学科に複数名の女性教員が配属され、女子学生への対応が良化した。

学部長及び人事委員会の面接を行ない、学部長より大学及び本学部における教員の教育研究の在り方を訓示しており、特に新規採用教員の辞令交付後に研修会を開き帰属意識を高めている。

FD活動を積極的に行っているいくつかの学科（生命農学科、生命化学科、海洋生物資源科学科、生物環境工学科）においては、講義のレポートを学科教員全員でチェックするなどにより、所属教員間での学生の教学に関する事項についての共通認識が形成されている（資料3-2）。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、日本大学FD推進センターより発行のLearning guideを全教員に配布するとともに、日本大学FD Newsletterを全教員へ周知徹底した。FD講演会を全教職員向けに開催予定であり、学外及び日本大学としてのFD活動の取組みについて、周知している。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、日本大学FD推進センターより発行のLearning guideを全教員に配布するとともに、日本大学FD Newsletterを全教員へ周知徹底した。FD講演会を全教職員向けに開催予定であり、学外及び日本大学としてのFD活動の取組みについて、周知している。研究科教員の研究業績は、質、量ともに向上している。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、いくつかの学科及び研究室教員の職務分掌を含めたFD活動、ひいては教育効果の向上を図る観点から更なる改善が必要であると考えている。

FD活動を積極的に行っている学科の数を増加させることが、改善すべきことである。

〈2〉生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学研究科5専攻，獣医学専攻1専攻における担当教員は，各学科に所属する教員のうち，大学院担当教員としての有資格者が，その任に当たっている。そのため学部・学科レベルのFDについては，そのあり方を熟知していると言えるが，大学院におけるFDは，教員と大学院学生の研究が同時進行的に進むので，FDの捉え方が学部に比べて抽象的になってしまう懸念がある。大学院における教員のFD活動のあり方について検討を加えたい。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，教員の採用，昇格についての手続き，審査は極めて公正で，厳格に行われており，今後の継続することが肝要である。

これまで，FD活動への取組み状況に学科間の偏りがあったが，全学FD活動とともに学部の活動に対して関心が増加している。このことは，授業アンケートの実施率やFD講演会の出席教員の増加などからも分かる。

〈2〉生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学研究科では，学部教育におけるFD活動に対する意欲が高まってきているので，これを大学院教育に対して実施する。

獣医学研究科も，生物資源科学研究科と同様である。

2 改善すべき事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，FD活動への関心を実行に移す方策については，学部FD委員会を中心に議論しなければならないところであるが，現在活発にFD活動を行っている学科の取組みを学部全体の活動へと広げなければならないと考えている。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では，研究科独自の大学院教育に対するFD活動としての体制を整えなければならない。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科は，生物資源科学研究科を参照

4. 根拠資料

3-1 教員組織の現況，日本大学生物資源科学部教員の採用，昇格，及び再任に関する内規

- 3-2 日本大学生物資源科学部教員の採用，昇格及び再任に関する内規，大学院担当教員一覧
- 3-3 教育懇談会で作成した資料（生命農学科，生命化学科，海洋生物資源科学科，生物環境工学科）

基準Ⅳ 教育内容・方法・成果

Ⅳ－1 教育目標，学位授与方針，教育課程の編成・実施方針

1. 現状の説明

1 教育目標に基づき学位授与方針を明示しているか。

[評価の視点]

- ・ 学士課程・短期大学士課程・修士課程・博士課程・専門職学位課程の教育目標の明示方法
- ・ 教育目標と学位授与方針との整合性
- ・ 学位授与方針における修得すべき学修成果，その達成のための諸要件等の明示

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，学士課程の教育目標は学部要覧に記載してある。また，学部のホームページの「教育情報」の項目において「学部の特徴－教育の考え方」として，「教育コンセプト」を明示し，さらに「教育研究上の目的について」の項目において，各学科の学士課程における教育目標を記載している。また，同じくホームページにおいて「入学者受入れ」，「教育課程編成・実施」，「学位授与」の3つのポリシーを明示し，教育目標と学位授与方針との整合性を図っている。ホームページは，学部・学科レベルで更新するごとに，これらの重要事項を分かりやすく，かつ，見やすく明示するように努めている。更に，修得すべき学習成果等の学習目標については，学位授与の方針に明示してある。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では，博士前期課程及び博士後期課程の教育目標は，大学院要覧（資料4-1-3）及び大学院ガイドブックに記載してある。また，大学院を含む学部のホームページ（資料4-1-2）の「教育情報」（資料4-1-2）における「教育研究上の目的について」の項目において，研究科及び各専攻の博士前期課程及び博士後期課程における教育目標を記載している。また同じくホームページ（資料4-1-2）において「入学者受入れ」，「教育課程編成・実施」，「学位授与」の3つのポリシーを明示し，教育目標と学位授与方針との整合性をはかっている。さらに修得すべき学習成果については，学位授与方針に明示してある。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では，博士課程の教育目標は，大学院要覧（資料4-1-3）及び大学院ガイドブック（資料4-1-4）に記載してある。また，学部のホームページの「教育情報」（資料4-1-2）における「教育研究上の目的について」の項目において，研究科における教育目標を記載している。また同じくホームページ（資料4-1-2）において「入学者受入れ」，「教育課程編成・実施」，「学位授与」の3つのポリシーを明示し，教育目標と学位授与方針との整合性をはかっている。さらに修得すべき学習成果については，学位授与方針に明示してある。

2 教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか。

[評価の視点]

- ・ 教育課程の編成・実施方針の策定とその明示方法
- ・ 教育目標・学位授与方針と教育課程の編成・実施方針との整合性
- ・ 科目区分，必修・選択の別，単位数等の明示

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，教育目標・学位授与方針と整合性のある教育課程の編成・実施方針については，学部のホームページに明示してある。すなわち，ホームページでは「教育課程編成・実施」のポリシーは「入学者受入れ」と「学位授与」のポリシーとともに明示し，教育目標と学位授与方針との整合性を図っている。また，各学科において「履修モデル」等を明示し，それを学習支援の一助とし，体系的な教育課程の編成について示している。さらに，科目区分，必修・選択の別，単位数等については，学部要覧に記載するとともに，授業計画（シラバス）に明示されている。シラバスは学部のホームページに掲載されていることから，学生は自宅においても次回以降の講義等の内容を確認することができる。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では，教育目標・学位授与方針と整合性のある教育課程の編成・実施方針については，大学院要覧，大学院ガイドブック及び学部のホームページに明示してある。すなわち，ホームページでは「教育課程編成・実施」のポリシーは「入学者受入れ」と「学位授与」のポリシーとともに明示し，教育目標と学位授与方針との整合性をはかっている。さらに，科目区分，必修・選択の別，単位数等については，大学院要覧に記載するとともに，授業計画（シラバス）に明示されている。シラバスは学部のホームページに掲載されていることから，自宅においてもその内容を確認することができる。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科は生物資源科学研究科を参照

3 教育目標，学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針が，大学構成員（教職員及び学生等）に周知され，社会に公表されているか。

[評価の視点]

- ・ 学内への周知方法とその有効性
- ・ 社会への公表方法とその適切性

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，教育目標については，学部要覧をはじめ，学部のホームページや学部が発行している学園ニュースなどを通じて大学構成員（教職員及び学生以外に，父母等）に周知されている。教育目標に加えて，学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針については学部のホームページの「教育情報」の項目に記載されている。学部のホームペ

ページは、特に多くの受験生が閲覧し、本学部を選択する際の参考になっていることから、大学構成員（教職員及び学生等）に周知されるばかりでなく、広く社会に公表されているといえる。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、教育目標については、大学院要覧（資料4-1-3）をはじめ、大学院ガイドブック（資料4-1-4）や学部のホームページ（資料4-1-2）を通じて大学構成員（教職員及び学生等）に周知されている。教育目標に加えて、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針については学部のホームページ（資料4-1-2）の「教育情報」の項目に記載されている。学部のホームページ（資料4-1-2）や大学院ガイドブック（資料4-1-4）は、受験生が閲覧し、本学研究科を選択する際の参考になっていることから、大学構成員（教職員及び学生等）に周知されるばかりでなく、社会に公表されているといえる。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科は生物資源科学研究科を参照。

4 教育目標、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針の適切性について定期的に検証を行っているか。

[評価の視点]

- ・ 教育目標、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針の適切性を検証する責任主体・組織、検証方法

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、教育目標、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針の適切性については、学科ごとに3つ（アドミッション、カリキュラム、ディプロマ）のポリシーを設定するにあたり、絶えずこれらの方針の適切性を議論し、学科の教育の目標や教育課程に合致させながら、時代の要請も勘案して学科のカリキュラムの改正へとつなげている。

その結果として、平成21年に農芸化学科から生命化学科、食品科学工学科から食品生命学科へ、そして平成22年には食品経済学科から食品ビジネス学科へと学科名称の変更と、それに伴うカリキュラムの改正を行った。さらに、カリキュラムの検討を各学科で議論し、その結果、動物資源科学科、食品ビジネス学科、森林資源科学科、生物環境工学科、国際地域開発学科が平成25年度に、生命化学科、獣医学科、海洋生物資源科学科、応用生物科学科、一般教養が平成26年度にカリキュラムの改正を実施した。

平成27年度には植物資源科学科が生命農学科へと学科名称変更及びそれに伴うカリキュラムの改正を行い、食品生命学科もカリキュラムの改正を行った。また、12番目の学科として新たにくらしの生物学科の設置を行った。

これらのその教育効果等の推移については、今後、十分な検証を行っていく。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、教育目標、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針の適切性については、学部全体における定期的な検証は行っていないが、専攻ごとに3つ（入学者受入れ、教育課程編成・実施、学位授与）のポリシーを設定するにあたり、これらの

方針の適切性を議論してきた。平成12年の生物資源科学研究科への改組以来、数度のカリキュラムの改正を行ってきた。そして平成20年度開始の博士前期課程における生物資源科学特論Ⅰ（必修）と生物資源科学特論Ⅱ（選択）設置以来、カリキュラムの改正は行っていない。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科では、教育目標、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針の適切性については、学部全体における定期的な検証は行っていないが、研究科における3つ（入学者受入れ、教育課程編成・実施、学位授与）のポリシーを設定するにあたり、これらの方針の適切性を議論してきた。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、平成21と22年度に学科名称及びカリキュラムの改正を3学科において行った。その後、カリキュラムの検討を各学科で議論し、その結果、平成25年度と平成26年度に各々5学科がカリキュラム改正を行い、平成27年度に1学科が学科名称変更及びカリキュラム改正、1学科がカリキュラム改正を行った。そして新たに1学科の設置を行った。さらに、全学共通初年次教育科目「自主創造の基礎1」を開講し、また、当学部に教育目標を十分に達成する目的で、「生物資源科学概論」を全学科共通の基礎専門科目として開講した。また、平成27年度から、全額共通の初年次教育「自主創造の基礎1」を開講している。さらに、当学部の教育目標を十分に達成する目的で、「生物資源科学概論」（1単位）を全学科（12学科）共通の基礎専門科目として開講している。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、専攻ごとに3つのポリシー（入学者受入れ、教育課程編成・実施、学位授与）を設定するにあたり、これらの方針の適切性を議論してきた。そして、平成20年度にカリキュラムの一部変更を行った。この過程で、教育目標、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針の適切性について点検・評価した。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科では、3つのポリシー（入学者受入れ、教育課程編成・実施、学位授与）を設定するにあたり、これらの方針の適切性を議論してきた。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、教育目標、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針の適切性の検証については、主に学科単位で行われているのが実態である。学部全体としては定期的な検証は、十分とはいえないため、優先順位の高い検討課題としたい。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、教育目標、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針の適

切性について組織として定期的に点検・評価を実施していない。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、学科主任等により構成される学部のカリキュラム委員会において、カリキュラムの改正を議論してきた。その過程において各学科がそれぞれの学科の教育課程の編成・実施方針について検証を行い、カリキュラム改正の是非について判断してきた。また、学科内のカリキュラム委員会等により定期的な検討を行っている学科もある（生命化学科）。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、学部における数学科におけるカリキュラム改正の過程での教育目標、学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針の適切性の議論が研究科へ波及することにより、効果が上がった。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、平成8年に学部学科の名称変更を行った。最近では、平成21年と22年に3学科（生命化学科、食品ビジネス学科、食品生命学科）、平成27年に1学科（生命農学科）が学科名称変更及びカリキュラムの改正を行った。また、新たに1学科の設置を行った。学科名称変更及びカリキュラム改正が一段落した今般、時代の要請や受験生の志望の動向を見極めながら、十分に教育効果等の検証を行っていく必要がある。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、研究科としての、将来の発展方策に対する議論を行うこと。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

4. 根拠資料

4-1-1 学部要覧

4-1-2 学部ホームページの教育情報の項目

4-1-3 大学院要覧，大学院ガイドブック，学部のホームページ

4-1-4 大学院ガイドブック

IV-2 教育課程・教育内容

1. 現状の説明

1 教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

[評価の視点]

- ・ 必要な授業科目の開設状況
- ・ 順次性のある授業科目の体系的配置とその適切性
- ・ 専門教育・教養教育の位置づけと量的配分の適切性（学士）
- ・ コースワークとリサーチワークのバランス（修士，博士）
- ・ 教育課程の適切性を検証する責任主体・組織，検証方法

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、それぞれの学科における必要な授業科目については適切に開設され、年次ごとに修得するように配置されている。学科によっては、当該学問の進展に伴う知識多様化や資格取得のために学科内にコースが設定されている。海洋生物資源科学科と生物環境工学科においては、日本技術者教育認定機構認定のJABEE資格（修習技術者）修得のためのコースが設けられている。また、授業科目修得の順序性を確保するねらいから、「履修モデル」を学科ごとに作成し、科目の体系化を図っている。教養教育と専門教育の関連性を円滑にする主旨から、基礎専門科目を5科目設置し、相互の連携を強化している。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、平成12年の生物資源科学研究科への改組以来、数度のカリキュラムの改正を行ってきた。平成20年度から複数の教員によるオムニバス講義である生物資源科学特論（必修）を生物資源科学特論Ⅰ（必修）と生物資源科学特論Ⅱ（選択）の2科目とし、専攻分野にとらわれない知識の教授を行うとともに、所属分野の関連科目の修得により修了要件を充足できることを図った。また、授業科目の体系化を図る上で、各専攻に4又は5分野を設定し、分野ごとに特講と演習の科目のセットを2組編成することにより、順次性のある体系的科目配置を実現している。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では、教育領域を「獣医比較形態学分野」「獣医比較機能学分野」「獣医感染制御学分野」「獣医疾病予防学分野」「獣医病態制御学分野」「獣医病態情報学分野」の6つの分野として構成し、附属家畜病院及び動物医科学センターと有機的な連携を行い、高度な専門知識の教授を行っている。

2 教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。

[評価の視点]

- ・ 教育課程の編成・実施方針と教育内容の関連性
- ・ 学士課程教育に相応しい教育内容の提供（学士・短期大学士）
- ・ 初年次教育・高大連携に配慮した教育内容の実施状況（学士・短期大学士）
- ・ 入学前教育の実施状況（学士・短期大学士）
- ・ 専門分野の高度化に対応した教育内容の提供（修士・博士）

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、教育課程の編成・実施方針に基づき、学士課程に相応しい教育内容を提供している。特に初年次教育としては、学部全体にわたる「生物資源科学フィールド実習」を平成19年度より設置した。また、同じ基礎専門科目として、キャリア教育及び自校教育を包含する日本大学及び本学部の教育課程、教育内容に合致した2つの全学科共通の初年次科目を平成27年度から開講している。高大連携に配慮した教育内容としては、学習支援センターにおいて学習の相談を行っているとともに、生物と化学の補習授業を平成23年度より開設した。入学前教育については、通信添削方式によるDVD教材を用い、推薦入学試験合格者に対し実施している（資料4-2-1）。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、各専攻の特講や演習を修得することにより修了することが可能である。これらの科目は多くの科目で複数の教員によるオムニバス方式であり、幅広い分野の知識を吸収することができる。また各専攻から推薦された3名の学外の先端的研究者や著名な研究者による特別講義（5専攻×3名＝15名）を実施し、専攻に限定されない幅広い専門分野の高度化に対応した教育内容を提供している。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科では、教育領域を「獣医比較形態学分野」「獣医比較機能学分野」「獣医感染制御学分野」「獣医疾病予防学分野」「獣医病態制御学分野」「獣医病態情報学分野」の6つの分野として構成し、附属家畜病院及び動物医科学センターと有機的な連携を行い、高度な専門知識の教授を行っている。また、斯界の著名な研究者を大学院講師として招聘し、専門性の高い大学院特別講義を開催している。平成27年度には国内の大学及び研究機関より3名の講師を招聘し、専門分野の高度化に対応した教育内容を提供している（資料4-2-2）。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部

「生物資源科学フィールド実習」では、学生の所属学科実習では実施していないフィールドにおける実習を受講できる機会となり、本学部の教育の多様性を体感し、修得させている。平成27年度から日本大学の自校教育を包含する「自主創造の基礎1」を本学部の体系化している教育課程の導入科目として、そして本学部の教育目標を十分に達成する目的で「生物資源科学概論」を初年次に開講した。「自主創造の基礎1」は、全学科の学生の

受講が可能で、大学での「学び」についての初年次教育として有効となっている(資料4-2-3)。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、学外の先端的研究者や著名な研究者による18講義により、専門分野の高度化に対応した教育内容を受講できることにより、効果が上がっている。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、フィールド実習を重要視している。平成 26 年度までは4か所、27年度からは5か所で実施しているが、実習場所(地域)によって受講生にアンバランスを生じている。この是正を検討課題とした。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、オムニバス方式の講義は、複数の教員による多様な高度に専門分野の知識を教授できるが、いっぽう教員相互の有機的な関連性が希薄になるため、それが改善すべき点である。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、各学科における「概論」や「基礎実験」により、初年次学生への大学における「学修」をきめ細かく教授し、また、体験させることにより、高大連携に配慮した授業科目を提供している。フィールド教育の更なる充実を図るため、「生物資源科学フィールド実習」の5つ目の実習地に北海道八雲の演習林を取り入れた。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、オムニバス方式の講義及び大学院特別講義により、複数の教員による多様な高度に専門分野の知識を教授できる。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、入学前教育については、通信添削方式によるDVD教材を推薦入学試験合格者に対し実施している。その実効性を検証する必要があるため、その検証方法について議論する。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、5専攻からなり、学部11学科に対する2階建て方式ではない。学部での異なる教育実績背景を持つ大学院学生に対する、高度に専門性のある内容の講義を提供することの困難さがある。

4. 根拠資料

4-2-1 リメディアル授業の資料

4-2-2 大学院特別講義一覧表

4-2-3 生物資源科学フィールド実習の資料

IV－3 教育方法

1. 現状の説明

1 教育方法及び学習指導は適切か。

[評価の視点]

- ・ 教育目標の達成に向けた授業形態（講義・演習・実験等）の採用
- ・ 履修科目登録の上限設定，学習・学修指導の充実
- ・ 学生の主体的参加を促す授業方法
- ・ 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導の実施状況（修士・博士）

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，教育目標の達成に向けて，各学科により講義・演習・実験等が実施されている。下級学年における演習や実験は必修としている。また，いくつかの学科では必修選択にしている学科もあるが，それぞれの学問の進展やカバーする学問分野の多様化に対応するべく科目を設置している。学外実習やインターンシップの科目は，進路や就職に向けての実務経験のための科目であり，学生は主体的に参加している。学習指導の充実を計るために，履修科目登録の上限設定を平成25年度入学者から実施している。高学年においては，少人数制のゼミナール形式の演習を各学科で行っている。この科目ではパソコンを使用し，パワーポイントを利用したプレゼンテーションによる発表形式を採用している。学生の参加型であり，主体性が要求される科目である。このアクティブラーニングを教育手法として多くの学科目を設定した「くらしの生物学科」が平成27年度に開設されている。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では，各専攻は複数の分野の教員から構成されている。このことから，博士前期課程及び博士後期課程における研究指導や学位論文作成指導は，研究室単位できめ細かく行われている。そして，研究科で開催する学位論文発表会にいたるまでに，研究室そして専攻内での予備的な発表会を実施し，内容の充実した論文の完成をめざす体制が整備されている。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では，大学院入学時に研究計画を作成し，それに基づいた指導計画をたてて指導にあたっている。研究領域においても「獣医比較形態学分野」「獣医比較機能学分野」「獣医感染制御学分野」「獣医疾病予防学分野」「獣医病態制御学分野」「獣医病態情報学分野」の6分野に所属する教員が，附属家畜病院及び動物医科学センターの教員と連携を保ち，指導を行っている。さらに，年に1回の科内の研究発表会を行い，獣医学研究科に属する全教員によりアドバイスを提供している。論文作成にあたっては，専門領域を担当する複数教員により指導が行われている。

2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。

[評価の視点]

- ・ シラバスの作成と内容の充実
- ・ 授業内容・方法とシラバスとの整合性、及びその検証方法

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、シラバスの作成と内容の充実については毎年見直しを行っている。授業回数ごとの時間の内容記載の充実と、学習目標や成績評価基準の記載の徹底化により教員ごとの内容の多寡は少なくなり充実した。そして、授業内容・方法とシラバスとの整合性が図られている。しかしながら、この整合性の確保については、各教員に依存し、各学科内では比較的、整合性が図られている。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、シラバスの作成と内容の充実については毎年見直しを行っている。授業回数ごとの時間の内容記載の充実と、学習目標や成績評価基準の記載の徹底化により教員ごとの内容の多寡は少なくなり充実した。そして、授業内容・方法とシラバスとの整合性が計られている。しかしながら、この整合性の確保については、各科目担当者に依存し、研究科全体での検証は行っていない。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。

[評価の視点]

- ・ 成績評価方法及び成績評価基準の明示
- ・ 成績評価方法及び成績評価基準の公正性・厳格性の確保
- ・ 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性
- ・ 既修得単位認定の適切性

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、厳格な成績評価、すなわち評価方法や評価基準は、科目ごとにシラバスに明示している。単位制度の趣旨に基づく単位認定方法としてGPA制度を採用しており、これに基づき単位認定が厳正に行われ、結果として単位認定の適切性及び公平・公正な成績評価が行われている。また、既修得単位の認定についても学則を前提にした申し合せや取扱要領に基づき、従来通り、適正かつ厳格な単位認定が行われている。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、大学院学生に対しても、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに従って単位認定は厳格に行われている。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。

[評価の視点]

- ・ 教育成果の検証方法及び検証結果を教育課程や教育内容・方法に結びつける方策とその有効性

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、授業の内容及び方法の改善を図るための全学部による組織的研修やその研究は実施していない。しかし、学科によっては演習委員会や学生実験委員会などにより解析した結果に基づき定期的な検証を行っており（生命農学科，生命化学科，海洋生物資源科学科，生物環境工学科），その結果を教育内容や方法の改善に結びつけている。学部全体としては、学生による授業アンケートは各教員あたり少なくとも1科目に対して行われており，その結果は集計後教員へフィードバックされている。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的研修・研究については実施していない。しかし、教育成果については博士後期課程では、専攻内における研究の進展状況の定期的な中間発表を行い検証している。博士前期課程においては、研究科全体で行う修士論文発表会により検証している。また、その成果は「修士論文要旨集」として冊子にまとめ、公開している。さらに、博士前期・後期課程の大学院学生が発表者または筆頭著者となり国内外での学会及び論文で発表していることは教育成果である。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では、教育成果についての定期的な検証は行っていないが、その結果は博士課程においては、専攻内における研究の進展状況の中間発表を行い検証している。また、大学院学生による学会発表や論文の公表は教育成果の検証の一端となる。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、学科内での委員会を設置し、その解析に基づき定期的な検証を行なっている複数の学科においては、その結果を教育内容や方法の改善に結びつけている。海洋生物資源科学科や生物環境工学科では、教員に対する学生の意見によるベストティーチャー賞を設け、教員の教育内容や方法の改善に役立てている。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、博士前期・後期課程の大学院学生が発表者または筆頭著者となり国内外での学会及び論文で多数発表していることにより、効果の上がっていることが示される。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科では、大学院学生が発表者または筆頭著者となり国内外での学会及び論文で多数発表していることにより、効果が上がっている。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、学生による授業アンケートを行っている。しかし、現在はこれらの結果に基づく組織的な検証は行っていない。授業アンケートの更なる有効活用を含め、教員の教育活動に対する適切な手法を検討したい。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的研修・研究について実施していないこと。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、JABEE資格に対応する学科（海洋生物資源科学科や生物環境工学科）においては、毎年定期的に教育内容や方法の改善に取り組んでいる。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、博士前期・後期課程の大学院学生が発表者または筆頭著者となり国内外の学会及び論文発表を行う機会を多く設定すること。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科では、大学院学生が発表者または筆頭著者となり国内外の学会及び論文発表を行う機会を多く設定することにより、効果が上がっている。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、授業の内容及び方法の改善を図るための研修、そして、定期的な検証を現在実施していない学科に対して、活動の実施を広げる。また、学科内教員でFD委員会を組織する学科が存在するので、この取り組みも波及させていきたい。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的研修・研究について実施する方策を議論すること。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

IV-4 成果

1. 現状の説明

1 教育目標に沿った成果が上がっているか。

[評価の視点]

- ・ 学生の学修成果及び目標達成度を測定するための評価指標の開発とその適用
- ・ 学生の自己評価, 卒業後の評価 (就職先の評価, 卒業生評価)

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では, 教育目標に沿った学生の学習成果を測るための評価指標の開発は行っていない。学生の自己評価及び就職先による評価についても学部として組織的には行っていない。

しかし, 学科ごとに4年次学生による卒業時の評価を数年にわたり集積している学科(動物資源科学科, 海洋生物資源科学科)もあり, そのデータをカリキュラム改定への資料としている。また卒業生の社会での活躍状況については, キャリアガイダンスや就職関連における授業・演習での卒業生による講師選定にも関連することから, 教員間における情報交換が行われている。また, 近年, 当学部の求人数が増加したことも社会から卒業生が高く評価されていることの結果と考えられる。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では, 大学院学生の学習成果を測定するための評価指標の開発は行っていないが, 博士前期・後期課程の大学院学生が発表者または筆頭著者となり国内外の学会における発表及び論文発表(資料4-4-1)の機会が増加していることは, 学習の成果を評価する手段の1つといえる。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では, 大学院学生の学習成果を測定するための評価指標の開発は行っていないが, 大学院学生が発表者または筆頭著者となり国内外の学会における発表及び論文発表(資料4-4-1)の機会が増加していることは, 学習の成果を評価する手段の1つといえる。

2 学位授与(卒業・修了認定)は適切に行われているか。

[評価の視点]

- ・ 学位授与方針に基づいた学位授与の実施状況とその適切性
- ・ 卒業判定手続きの適切性
- ・ 学位審査及び修了認定の客観性・厳格性を確保する方策(修士・博士, 専門職)

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では, 定期試験後の成績登録はWeb上で各科目担当教員により行われ, 教務課により各学生の「単位履修表」が作成される。これらに基づき, 各学科での確認を

慎重かつ厳正に行う。結果として、学位授与手続きは学位授与基準に基づき、適切に行われている。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、Web登録による担当教員からの単位認定の仕組みとともに、博士後期課程においては、学位授与基準及び学位授与手続きは「日本大学大学院生物資源科学研究科における学位（博士）申請手続（申合せ）」に基づき、論文公表確認、専攻内、研究科における発表会の実施により客観性・厳格性は確保されている。また、博士前期課程においては、研究科全体での論文発表会（資料4-4-1）と専攻内での担当教員による修了認定により、客観性・厳格性が確保されている。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では、Web登録による担当教員からの単位認定の仕組みとともに、博士課程においては、学位授与基準及び学位授与手続きは「日本大学大学院獣医学研究科における学位（博士）申請手続（申合せ）」に基づき、論文公表確認、研究科における発表会の実施により客観性・厳格性は確保されている。また、研究科全体での論文発表会と担当教員による修了認定により、客観性・厳格性が確保されている。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、定期試験後の成績登録はWebを利用して行われるため、事務手続きの時間的な削減は達成され、学位授与手続きが適切に行うための確認等に対応できることとなった。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、博士後期課程においては、学位授与基準及び学位授与手続きは「日本大学大学院生物資源科学研究科における学位（博士）申請手続（申合せ）」に基づき、論文公表確認、専攻内、研究科における発表会（資料4-4-1）の実施により客観性・厳格性は確保されている。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では、博士課程においては、学位授与基準及び学位授与手続きは「日本大学大学院獣医学研究科における学位（博士）申請手続（申合せ）」に基づき、論文公表確認、専攻内、研究科における発表会（資料4-4-1）の実施により客観性・厳格性は確保されている。

2 改善すべき事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、機械的処理が増加したことにより、処理過程でのミスの発見を含めた確認作業の必要性が重要視されるため、更なるチェックシステムが必要と思われる。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、定期試験後のWeb成績登録により、単位修得状況がより早く把握できるようになり、事務的な軽減となり、卒業認定を適切に行うことにつながっている。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、博士前期・後期課程とも、研究科全体で行う論文発表会の実施は客観性・厳格性を確保するために効果が上がっている。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科では、生物資源科学研究科とともに研究科全体で行う論文発表会の実施は客観性・厳格性を確保するために効果が上がっている。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、機械的処理が増加したことにより、処理過程でのミスの発見を含めた確認作業の必要性が重要視されるため、更なるチェックシステムが必要と思われる。

4. 根拠資料

4-4-1 修士論文発表会要旨集

基準 V 学生の受け入れ

1. 現状の説明

1 学生の受け入れ方針を明示しているか。

[評価の視点]

- ・ 大学・学部・研究科等の理念・目的・教育目標に基づいた学生の受け入れ方針の策定とその明示方法
- ・ 当該課程に入学するに当たり、修得しておくべき知識等、学生に求める内容・水準の明示
- ・ 本学への入学を希望する障がいをもつ学生や社会人、外国人留学生等、多様な学生の受け入れ方針の策定とその明示方法

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、アドミッション・ポリシーは、あらゆる機会を通して公開している。受験者向け「生物資源科学部ガイドブック」「2016年度版 Q&A入試ガイド」にはもちろんのこと、学部ホームページの「教育情報」には、入学者受入れ方針(アドミッション・ポリシー)を明示し周知している。また、学科ごとの教育研究上の目的も公開しており、これによって求める学生像と、その育成目標も明示している。

入学するにあたり習得しておくべき知識等の内容・水準を知らしめる方法として、推薦入学合格者には、当該学科から入学前教育として推薦図書を提示しての感想文や、過去の入学試験問題解説などを課している。また、理科(物理, 化学, 生物), 英語及び文章表現力に関わる教材一式(テキスト, DVD, 確認テスト)を希望者に購入させ、これらの講座を受講させることで基礎学力向上させている。全学科ともシラバスを公開しており、その中には「準備学習の内容・履修条件」で事前に習得しておくことが好ましい準備学習を明記している(資料5-1, 5-2, 5-3)。

本学部は、理系で実験実習が多いことから、障害のある志願者には、受験前に「事前協議」を行っている。事前協議とは、志願者及び保護者(高校の担任が同伴する場合もある)に本学部まで来校してもらい、志望学科における実験実習科目の内容などを志望学科の主任・学務担当(入試管理委員長・一般教養主任・教務課長・入試担当者が陪席)から詳細に説明して、障害が入学後に当該科目の受講が可能か否かを当人に判断してもらい、志願者自身とその保護者及び学科主任の3者が、受講可能と判断される場合に限り受験を許可している(合格した場合は入学を許可する)

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、アドミッション・ポリシーは、あらゆる機会を通して公開している。受験者向け「大学院ガイドブック」にはもちろんのこと、学部ホームページの「大学院」には、入学者受入れ方針(アドミッション・ポリシー)を明示して周知している。また、専攻ごとの教育研究上の目的も公開しており、これによって求める大学院学生像と、その育成目標も明示している(資料5-4)。

入学するにあたり習得しておくべき知識等の内容・水準を知らしめる方法として、毎年7月中下旬に実施する「大学院説明会」で学務担当及び各専攻主任が研究科の理念・目標の他、各専攻の受け入れ方針などの説明を行っている。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

2 学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に学生募集及び入学者選抜を行っているか。

[評価の視点]

- ・ 学生の受け入れ方針に基づいた学生募集方法、入学者選抜方法の適切性
- ・ 入学者選抜において透明性を確保するための措置の適切性

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、学生の募集方法・入学者選抜方法は、学部ホームページの「受験生の皆さんへ」、受験生向け「2016年度版 Q&A入試ガイド」に明記して公開している。また、年間2回3日間実施しているオープンキャンパスの「学科別個別相談」「入試制度コーナー」学部祭開催時の「学科別個別相談」で周知し、受験の機会均等を図っている。さらには11月上旬に例年開催される学部祭の期間中にも「進学相談会」を開催し来場する高校生や父母らに対応している（資料5-1）。

また、入試に関するすべての事案は、入試管理委員会で検討して、最終的には教授会に諮って決定することによって適切性の検証や、選抜方法の透明性の確保を担保している。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、学生の募集方法・入学者選抜方法は、学部ホームページの「大学院」、受験生向け「大学院ガイドブック」に明記して公開している。

また、入試に関するすべての事案は、入試管理委員会で検討して、最終的には大学院分科委員会に諮って決定することによって適切性の検証や、選抜方法の透明性の確保を担保している（資料5-4）。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

3 適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

[評価の視点]

- ・ 入学定員に対する入学者数比率及び収容定員に対する在籍学生数比率の適切性
- ・ 収容定員に対する在籍学生数の過剰・未充足に関する対応の適切性

〈1〉 生物資源科学部

新入生の収容定員は、募集定員の1.10に設定し、1.15を越えないように合否判定を行っている。そして、収容定員に対する在籍学生数比率は1.25を越えないように設定している。

しかし、平成22年度から25年度にかけて1.15となるように在籍者数の管理を行っている。定員に対する在籍学生数の管理は、入学手続き者に休学からの復学者数及び再履修者数の過去3カ年の平均人数を加えた学生数を管理学生数としている。この数字が定員の1.25に満たない場合は、短期大学部からの編入学者募集数としている。また、1.25を越える場合は、4年間の総学生数で調整しており、最終的には各学年とも1.25を越えないように調整している。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、新入生の収容定員は、研究科としての合計募集定員の100%を目標としている。博士前期課程では、ほぼ100%であるが、博士後期課程は約43%と少なく、その充足率達成が望まれる。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科では、新入生の収容定員は、研究科としての募集定員の100%を目標としており、充足率は130%で、少し多い。

4 学生募集及び入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。

[評価の視点]

- ・ 学生募集及び入学者選抜について検証する仕組みの確立とその適切性

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、新年度のはじめに、入試管理委員会で前年度入試全般について検証を行っている。

〈2〉 生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、新年度のはじめに、入試管理委員会で前年度入試全般について検証を行っている。

〈3〉 獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部

生物資源科学部では、本学部学科の社会的な評価、すなわち大学偏差値が高まってきており、C方式(大学入試センター試験利用入試)の手続き者の急増や、国立大との併願者の手続き率増加など在学生のレベルがアップしてきた。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，本学部の大学偏差値が高まってきており，さらに高めることを目指す。

4. 根拠資料

- 5-1 2016年度 Q&A入試ガイド
- 5-2 生物資源科学部ガイドブック
- 5-3 学部ホームページ
教育情報 <http://www.brs.nihon-u.ac.jp/about/policy/>
- 5-4 学科・大学院 <http://www.brs.nihon-u.ac.jp/education/>

基準Ⅵ 学生支援

1. 現状の説明

1 学生が学修に専念し、安定した学生生活を送ることができるよう学生支援に関する方針を明確に定めているか。

[評価の視点]

- ・ 学生に対する修学支援，生活支援，進路支援に関する方針の明確化
- ・ 修学支援，生活支援，進路支援に関する方針の教職員間での共有方法

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，学内外の各種奨学金への周知を積極的に行い，経済的困窮学生に対する支援を拡大し，また進路支援の充実もはかっている。これらの支援方法については，学生要覧等で明確化している。

また，それらの方針については，教授会をはじめ，学部長の諮問機関である各学科選出の教職員で構成される各種委員会にて共有している。

2 学生への修学支援は適切に行われているか。

[評価の視点]

- ・ 奨学金等の経済的支援措置の適切性
- ・ 障がいのある学生等サポートが必要な学生に対する修学支援措置の適切性

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では，学生への奨学金情報提供は，日本学生支援機構奨学金については4月に説明会を開催し，他の奨学金については学内掲示板，ホームページ，学内放送，教員による呼びかけ等での広報を積極的に行い，学内奨学金は平成26年度実績として，学業成績優秀者66名へ総額5,116万円，経済的な理由による修学困難な学生64名へ総額2,355万円の給付を行った。

また，障がいのある学生はいない。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では，学生への奨学金情報提供は，日本学生支援機構奨学金については4月に説明会を開催し，他の奨学金については学内掲示板，ホームページ，学内放送，教員による呼びかけ等での広報を積極的に行い，学内奨学金は平成26年度実績として，学業成績優秀者11名へ総額560万円，経済的な理由による修学困難な学生3名へ総額75万円の給付を行った。

また，障がいのある学生はいない。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科では，学生への奨学金情報提供は，日本学生支援機構奨学金については4月に説明会を開催し，他の奨学金については学内掲示板，ホームページ，学内放送，教員

による呼びかけ等での広報を積極的に行い、学内奨学金は平成26年度実績として、学業成績優秀者5名へ総額295万円の給付を行った。

また、障がいのある学生はいない。

3 学生の生活支援は適切に行われているか。

[評価の視点]

- ・ 心身の健康保持・増進及び安全・衛生への配慮とその適切性
- ・ ハラスメント防止のための措置

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、学生の生活支援においては、学生の心身の健康保持及び安全・衛生の確保及びハラスメントの防止に務めており、その目標を達成するため保健室、学部学生相談室、教員等との連携を図り、学生の健康管理の一環として、毎年新学期に全学生を対象とした定期健康診断を実施し9割を超える学生が受診し、健康保持・増進を行っている。学生相談については、相談室に月～金でカウンセラーが2名常駐し日7時間開室している。隣接したフリースペースも月～金でカウンセラーが在室時に開放している。

また、学生に対しては毎年「学生生活 GUIDE」（資料6-1）、「学生事故防止マニュアル」（資料6-2）を配付し、種々のトラブル対策法を周知している。

教職員向けにはハラスメント防止のためFDの一環として、定期的に外部から講師を招き講演会を実施している。

平成26年度は12月11日及び1月23日にそれぞれ「ハラスメントのない、教育・研究・職場環境をめざして」、「学生相談から見た教員と学生」と題し、講演会を開催した。

4 学生の進路支援は適切に行われているか。

[評価の視点]

- ・ 進路選択に関わる指導・ガイダンスの実施状況と適切性
- ・ キャリア支援に関する組織体制の整備
- ・ 関連する国家試験に対する支援体制

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

- ・ 進路選択に関わる指導・ガイダンスの実施状況と適切性

平成24年度は、キャリアデザイン講座（4回、延133名参加）、就職ガイダンス（5回、延4,474名）などを含む77行事を実施し、延23,953名が参加した（人数は短期大学部及び大学院生を含む）。また平成25年度は、就職ガイダンス（5回、延3,645名）などを含む76行事を実施し、延23,853名が参加した（人数は短期大学部及び大学院生を含む）。また平成26年度は、キャリア支援ガイダンス（3回、延432名参加）などを含む103行事を実施し、延22,988名が参加した（人数は短期大学部及び大学院生を含む）。

- ・ キャリア支援に関する組織体制の整備

キャリア支援は正課の選択科目「キャリア・デザイン入門」（1年生対象）、「キャリ

ア・デザイン概論」(2年生対象)を開設し、全在籍学生の過半数が受講する中、これを補完する支援活動として就職指導課(課長1名、課員5名、臨時職員1名、派遣職員3名)が担当し、「キャリア・進路支援講座」2年生を主対象に展開している。また併設の就職資料室において個別に学生の就職指導に当たっている。

・関連する国家試験に対する支援体制

平成24年度は、国家総合職試験対策としては、日本大学公務員試験支援センター主催の教養対策(基礎講座186コマ52名、実践講座148コマ23名受講)及び平成24年度から平成26年度の農学関連職実践専門講座(6区分、平成24年度39回、平成25年度46回、平成26年度47回)を実施した。

また、同一般職試験などの対策としては、日本大学公務員試験支援センター及び生物資源科学部主催の基礎講座(平成24年度26コマ145名、平成25年度48コマ165名、平成26年度68コマ303名)、実践講座(平成24年度64コマ77名、平成25年度64コマ103名、平成26年度68コマ113名)、合格完成講座(平成24年度40コマ55名、平成25年度40コマ57名、平成26年度39コマ78名)及び直前講座(平成24年度30コマ24名、平成25年度30コマ30名、平成26年度24コマ37名)を実施した。

平成24年度から平成26年度の合格者は、国家総合職2名、国家総合職相当(獣医)3名、国家一般職8名、国家一般職相当(畜産)2名、その他(自衛官など)14名であった。

なお、国家試験に関しては受験者数を正確に把握していないため、合格率は算出できない。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

(1) 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部の学生支援では、平成26年度から本部からの派遣カウンセラーを1名増員し、よりきめ細やかな対応が可能となった。

また、校友会奨学金の総額を500万円から700万円に増額し、個人への給付額も20万円から25万円へ増額、また、採用枠も25名から28名となった。

進路支援では、前回報告で就職支援諸行事への参加意欲が不十分な学生が少なくなく、基本的意識啓発が重要と捉え、各学科での臨時ガイダンスを展開するなど努めてきた状況にあったが、その後さらに諸ガイダンスに関して種々の改善に注力してきた。具体的にはガイダンスのテーマ設定、内容の進化は元より、開催時間帯の調整にも工夫し、より出席率が上がるような環境整備に努め、結果として奏功してきている。

また、個別相談についても平成27年度からキャリアカウンセラー人材を増やし、学生ニーズに敏感に対応できる体制強化に努め、相談学生数も確実に増加している。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，本学部宛に直接提出される求人情報（年間約 1,100 件）の閲覧，諸ガイダンス・講座の記録動画の視聴に関して，インターネットを介して随時可能となるよう環境整備する予定。

個別相談の学生ニーズに応じて，さらにキャリアカウンセラーの増員も検討課題。

4. 根拠資料

6-1 学生生活GUIDE

6-2 学生事故防止マニュアル

基準Ⅶ 教育研究等環境

1. 現状の説明

1 教育研究等環境の整備に関する方針を明確に定めているか。

[評価の視点]

- ・ 学生の学修及び教員による教育研究環境整備に関する方針の明確化，教職員間での共有方法
- ・ 校地・校舎・施設・設備に係る大学・学部等の整備計画
- ・ 未使用校舎・講堂等の有効活用計画

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

学生の学習及び教員による教育研究環境整備に関する方針は，年度初めに学部長の施策方針が執行部会及び学科主任会・教授会で説明されて明確化している。また，校地・校舎・施設・設備に係る大学の計画は，次年度予算の編成時に組み込まれ，執行部会で議論し，学科主任会・教授会に諮られ，明確化されている。

一方，正規カリキュラム以外での教育環境の整備は，第一種委員会(学務・学生・研究・企画広報・就職指導)で議論されたものが，執行部会に上程されて検討され，整備計画に反映される。その内容は，研究の進展，社会貢献，研究成果の社会還元などである。

2 十分な校地・校舎及び施設・設備を整備しているか。

[評価の視点]

- ・ 校地・校舎等の整備状況とキャンパス・アメニティの形成
- ・ 校地・校舎・施設・設備の維持・管理及び安全・衛生・防犯・防災に関する責任体制の確立とシステムの整備状況
- ・ 施設・設備面におけるバリアフリーの整備状況

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

本学部は，校舎・運動場・附属研究施設・農場・演習林等用地として1道4県に総面積 $27,638,487.55\text{m}^2$ (Ⓔ $27,559,921.30\text{m}^2$)の校地を有している。このうちメインキャンパスである湘南校舎では，学生及び教職員にとって快適で安全性に優れた施設・環境，豊かな自然環境をベースとしたキャンパス・アメニティの向上を重点にキャンパス整備を展開している(「大学基礎データ」表5)。

3 図書館，学術情報サービスは十分に機能しているか。

[評価の視点]

- ・ 図書，学術雑誌，電子情報等の体系的整備及び量的整備の適切性
- ・ 図書館の規模，司書の資格等の専門能力を有する職員の配置状況
- ・ 開館日・時間，閲覧座席数，情報検索設備などの利用環境とその適切性

- ・ 国内外の教育研究機関との学術情報相互提供システムの整備

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，生産・利用科学，生命科学，環境科学の3分野を基軸として幅広く資料を収集し，図書約30万冊，学術雑誌約4,600種，電子資料約89,000タイトルが利用可能で，学習・研究に必要な資料が体系的に整備されている。

図書館は，地上4階建て総面積約6,200㎡，閲覧席850席，開架書庫，個人閲覧室，ラーニング・commonsとして，語り・学びの場「2階情報サロン」やグループ学習室を設置し，「情報サロン」には大学院生等による学習支援ヘルプデスクが開設され，レポートや論文の作成支援，資料の探し方等をサポートしている。

職員数は，専任5名，非常勤3名分，業務委託6名分の計14名で，そのうち専任2名，非常勤1名，業務委託4名分の計7名が司書の有資格者であり，図書選書，目録作成，現物貸借・文献複写，レファレンスにおいて専門能力を発揮している。

開館日・開館時間は，授業開講に合わせて適切に開館しており，学期末試験前・期間中の日曜日や冬季休業期間は，1階自習室（46席）のみ休日開放している。

館内の情報検索設備は年次計画により整備され，平成25年度には蔵書検索性パソコン10台，情報検索・学習支援用パソコン52台のほか，館内貸出用ノート型パソコン5台の計67台を所有していたが，平成26年度にWindowsOSの問題により利用可能なパソコンの台数は大幅に減少した。さらに隣接する新1号館に学習支援用パソコン10台を移設した結果，図書館の情報検索設備は，蔵書検索性パソコン5台，館内貸出用ノート型パソコン3台の計8台であり，電子資料の利用環境は低下している。

国内外の教育研究機関との学術情報相互提供システムについては，国立情報学研究所のNACSIS-ILL (Inter-Library Loan: 図書館間相互貸借) システムや英国図書館のBLDSC (British Library Document Supply Centre) 文献複写サービスを活用して現物貸借・文献複写の依頼・受付を行っているほか，近隣の藤沢市・綾瀬市・座間市・茅ヶ崎市の市立図書館との相互協力協定により，地域在住・在勤者に図書館を開放し，「知(地)の情報拠点」として，学生と地域社会との交流が図られている(資料7-1, 7-2)。

4 教育研究等を支援する環境や条件は適切に整備されているか。

[評価の視点]

- ・ 教育課程の特徴，学生数，教育方法等に応じた施設・設備の整備状況
- ・ ティーチング・アシスタント (TA)，リサーチ・アシスタント (RA)，技術スタッフなど人的配置の適切性
- ・ 教員の研究費・研究室及び研究専念時間の確保
- ・ 研究成果を発表する機会の確保，支援措置の適切性

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，これまでに各種の学術研究助成事業により施設を整備してきた。それには整備の当該学科はじめ関連学科の研究教育に役立てられてきている。また，附置

機関の整備も現場を生かした実験実習並びに研究を充実させるため進められ、学部が重視するフィールド科学実習を推進する上で大いに効果を示している。

近年、大学院への進学率が上がる中、大学院生に対する学習、研究支援としてティーチング・アシスタント（TA）制度を導入している。年々志望者が増加する中、大学院生・学部双方で支援の在り方を検討しTA選抜、特別研究員制度、各種奨学金制度などを進め支援の強化を計っている。

教員にとって学生の教育の実をあげることと研究を推進することは基本であり、そのための専念時間は各自の意識に任されている。学部としては、就業規則と合わせその点を常に確認して通達し研究教育で実があげられるよう配慮している。

5 研究倫理を遵守するために必要な措置をとっているか。

[評価の視点]

- ・ 研究倫理に関する学内規程・内規等の整備状況
- ・ 研究倫理に関する学内審査機関の設置・運営状況の適切性

(1) 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、本部で策定されているガイドライン・要項等に基づき、平成24～25年度は、4月に行われる「研究費等の取扱い手引き」説明会及び9月に行われる「科学研究費補助金」説明会において、「研究費不正使用防止」を中心とした内容を加えて説明を行った。平成26年度からは、上記内容に加えて、本部で作成した「研究費不正使用防止ハンドブック」を用いて、全教員、研究費に携わる全職員や大学院生を対象とした「研究費不正防止に係るコンプライアンス教育」を行い、理解度を測る確認書や誓約書の提出も義務付けた（資料7-3）。さらに、平成27年度からは、文部科学省からの通知を踏まえ、本部の内規・要項等が制定・改正され、これに基づき、eラーニングシステムを用いた「研究倫理教育」も行われる予定である。

なお、コンプライアンス教育や研究倫理教育を行うに当たっては、学部の研究委員会の下に設置されている「コンプライアンス専門部会」により内容を検討し実施している。

また、教職員だけでなく、平成24年度からは、学部学生に対しLearning Guideを配布し、適宜授業で取り入れることによって研究倫理に関する教育を実施している。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

(1) 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、ラーニング・コモンズ「情報サロン」に開設した大学院生等による学習支援ヘルプデスクで、レポートや論文の作成支援、資料の探し方等をサポートしており、平成25年度ではレファレンス件数187件のうち、職員によるカウンターでの利用指導・文献所在調査の69件に次ぎ、大学院生等によるヘルプデスクでのレポート作成支援等

は52件で、学生協働の学習支援は一定の効果を上げている（資料7-4）。

研究倫理については、前項に記載した説明会や教育を行った際の出席率も高く（資料7-5）、今まで以上に研究費の不正使用防止への取り組みに対する認識が高まっていると同時に、研究費使用に当たって、事務局への事前相談も増えている状況である。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、WindowsOSの問題等により、情報検索設備が大幅に減少しており、館内で電子資料を有効に利用する環境が整っていない（資料7-6）。

また、電子資料の利用状況は、主要な電子ジャーナルであるScienceDirectの年間全文利用件数が平成23年の71,385件をピークに年々減少し、平成26年は62,523件に低下した反面、その契約金額は、原価の値上がりや外国為替円安基調により高騰し、平成24年度の約3,200万円から平成26年度は約3,600万円に値上がり、資料購入費の予算が逼迫し、今後は全タイトルの継続購読が困難な状況にある（資料7-7）。

今後、研究費の不正使用防止だけでなく、研究活動における不正行為への対応もしていかなければならないことから「研究倫理教育」を徹底することが重要であると考えられる。教職員はもとより大学院生や学部学生なども対象となってくるため、どのようにすれば効果的に普及させられるかという大きな課題がある。大学院の場合には、修士論文や博士論文が公開されることから、早急な対応が求められるところである。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、ラーニング・コモンズ「情報サロン」の空間に、情報検索・学習支援用パソコンを配備して、図書と電子資料の融合を図る学術情報利用環境を整備するとともに、引き続き人的支援として大学院生による学習支援ヘルプデスクの運営を維持し、学習支援機能の向上を図る。

教員の研究活動が適切かつスムーズに行われるよう、教員と職員及び職員間における連携を密にし、信頼関係の更なる強化に努めることが重要である。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、WindowsOSの問題等により減少した図書館の情報検索設備については、隣接する1号館で運用を開始した無線LANの利用環境に準じて、図書館内にも無線LANを配備し、年次計画で情報検索・学習支援用端末の整備を図る。

また、電子資料の利用契約については、主要な電子ジャーナルのパッケージ買いを止め、費用対効果の観点から利用度に応じたタイトルの見直しを図るとともに、職員や外部の専

門講師による電子資料利用講習会を開催して利用促進に努める。

今後行われるe-ラーニングを使用した「研究倫理教育」について、現時点で実施していないため、将来の方策を記載することは難しいが、学生への普及を考えると、教育部門（学務委員会等）との連携が不可欠であると考えている。

4. 根拠資料

- 7-1 2014 LIBRARY GUIDE（日本大学生物資源科学部図書館利用案内）
- 7-2 日本図書館協会/大学・短期大学・高専図書館調査2015
- 7-3 平成26年度コンプライアンス教育資料
- 7-4 文部科学省/平成26年度学術情報基盤実態調査《大学図書館編》
- 7-5 平成26年度コンプライアンス教育受講状況報告書
- 7-6 平成27年度第1回付属機関・付属研究所・付属施設に関する協議会配付資料
- 7-7 平成27年度第1回電子資料導入に関する打合せ配付資料

基準Ⅷ 社会連携・社会貢献

1. 現状の説明

1 社会との連携・協力に関する方針を定めているか。

[評価の視点]

- ・ 産・学・官等との連携の方針の明確化
- ・ 地域社会への連携・協力方針の明確化

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

○産・学・官等との連携の方針

産業界，公官庁との連携を促進するため，産・官が募集している各種研究助成金への応募を呼び掛けている。学部内学術研究助成金の応募に当たっては，産・官からの競争的外部研究への応募を義務付けている。またこれら申請書作成の支援を実施している。

○地域社会への連携・協力

生物資源科学部には，キャンパス内や近隣地，全国の各地に設置されている教育・研究施設があり，その活動目的は，教育・研究を補助すること，また広く社会に貢献することにある。

付属農場や演習林，臨海実験所など自然の中での体験学習の場を提供している。博物館や図書館などは，一般の利用にも開放し，来館者数は年間2万人（学内者を含む）を超えている。キャンパス内の研究所や研究センター等では先端的な研究が行われており，その成果の一部は学部ホームページ，各種紀要を通じて社会に発信している。

2 教育研究の成果を適切に社会に還元しているか。

[評価の視点]

- ・ 教育研究の成果を基にした社会へのサービス活動の実施状況
- ・ 学外組織との連携・協力による教育研究の推進状況
- ・ 地域交流事業等への積極的参加
- ・ 社会連携・社会貢献の適切性を検証する仕組みの確立とその適切性

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

○教育研究の成果を基にした社会へのサービス活動の実施

生物資源科学部では，教育研究成果の社会への還元として，学部全体の行事としては，国が定めた科学技術週間に行われる「科学技術公開講座」，地域連携の一環で藤沢市と共催で行われる「市民講座」及び学部祭開催時に行われる「秋季特別公開講座」などがある。この他，学科や研究所が主催で行われる公開シンポジウムやセミナーなど多数の講座を開催している（資料8-1）。

○学外組織との連携・協力による教育研究の推進

学部外に設置されている教育・研究施設が位置する市町村との連携による「地域サミ

ット」が、平成24年度から開催され、特定の地域を対象とした域学研究の推進を図っている（資料8-2）。また、学部研究者の研究領域に応じて、全国の市町村や地域との連携を実施されている。

これらの連携の成果は毎年開催している「全国農村サミット」において発表すると同時に、シンポジウムで議論を深めている（資料8-3）。

以上のような域学連携や産官学連携に繋げるために、各研究者の研究内容や業績については、随時、学部や学科のホームページで公開している。

○地域交流事業等への積極的参加

地域連携に関しては、特に地元である藤沢市関連の様々な行事への参加や地元の小中学校との交流などにも積極的に対応している。主な活動実績は以下のとおり。

- ・ふじさわ産業フェスタへの食品加工実習所による出展。
- ・藤沢市民まつり「湘南ファンタジア」への参加。
- ・湘南新産業創出コンソーシアム主催「創業・新事業進出フォーラム」への参加。
- ・藤沢市と生物環境科学研究センターとの連携によるビオトープ管理者養成講座開催。
- ・生物環境科学研究センターにおける小中学校からの職場体験学習の受け入れ。
- ・生物環境科学研究センター亀井野小学校の総合学習に対する支援。
- ・付属農場、演習林等への見学依頼などに対する積極的に対応。
- ・養護施設との連携による付属農場バラ園の利用。
- ・富士自然教育センターと静岡県富士宮市との連携による不耕作地の積極的共同利用。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

現状で記載した各種公開講座等や行事に関しては、リピーターが多く、地域連携に貢献していると考えている。また、終了後にアンケート（資料8-4）なども実施し、翌年度の計画に際して活用させてもらっている。

また、藤沢市関連の行事において、地元の企業と連携した食品開発及び販売に繋がる事例も出てきている。

2 改善すべき事項

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部には、多くの優れた研究を行っている研究者がおり、その研究内容について、インターネットや印刷物を通じて一般の方や企業の方に周知しているところであるが、さらにホームページ等を充実して、積極的に紹介していくことが必要である。

また、学内研究者による学外組織との共同研究等の実状把握が不足している。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，現状において，地域連携や地域貢献は出来ていると考えられるが，更なる地域連携や産官学連携を目指し，官公庁や企業等との連携・協力及び対話が必要であると考えている。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，点検・評価の項目で記載したとおり，本学部が持っている知的財産については，まだまだ紹介できていない部分があるので，インターネットやマスコミ等を積極的に活用した広報活動が，重要であると考えている。

4. 根拠資料

- 8-1 公開講座開催案内
- 8-2 地域サミット開催案内
- 8-3 全国農村サミット開催案内
- 8-4 公開講座アンケート集計表

基準Ⅸ 管理運営・財務

Ⅸ－1 管理運営

1. 現状の説明

1 大学の理念・目的の実現に向けて、管理運営方針を明確に定めているか。

[評価の視点]

- ・ 中・長期的な管理運営方針の策定と大学構成員への周知
- ・ 教授会の役割の明確化

〈1〉生物資源科学部

生物資源科学部では、学則第5条により教授会を置き、管理運営方針を含む教学上重要な事項を審議している。学部長の諮問機関としての各種委員会を設置し、そこで学部の問題について検討し、その結果を学部長が統括する執行部会、学科主任会で協議し、最終的に教授会で審議している。

〈2〉生物資源科学研究科

生物資源科学研究科では、学則第110条により分科委員会を置き、管理運営方針を含む教学上重要な事項を審議している。学部長の諮問機関としての各種委員会を設置し、そこで学部(大学院を含む)の諸問題について検討し、その結果を学部長が統括する執行部会、専攻主任会で協議し、最終的に分科委員会で審議している。

〈3〉獣医学研究科

獣医学研究科は、生物資源科学研究科を参照。

2 明文化された規程に基づいて管理運営を行っているか。

[評価の視点]

- ・ 学長、副学長、学部長・学科長及び研究科長等の選考方法の適切性

〈1〉生物資源科学部、生物資源科学研究科、獣医学研究科

生物資源科学部では、寄附行為を含む日本大学規程が整備され、日本大学教育職組織規程により、学部長等の権限が定められており、またその補佐体制も明文化され、これらを適切に運用する。また学部長は、学部長選挙規程により公明正大に選出される。

3 大学業務を支援する事務組織が設置され、十分に機能しているか。

[評価の視点]

- ・ 事務組織の構成と人員配置の適切性
- ・ 多様化する業務内容への対応策や事務機能を高めるための方策とその有効性
- ・ 職員の採用・昇格等に関する諸規程の整備とその運用の適切性

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，事務組織は，事務職組織規程に基づき編成され，学部事務分掌規程，職員の採用及び資格等に関する規程により能率的な運営を図っている。

4 事務職員の意欲・資質の向上を図るための方策を講じているか。

[評価の視点]

- ・ スタッフ・ディベロップメント（SD）の実施状況と有効性

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，定期的に階層別，職域等による研修会を開催し，意欲・資質向上の伸展を促している。

IX-2 財務

1. 現状の説明

1 教育研究を安定して遂行するために必要かつ十分な財政的基盤を確立しているか。

[評価の視点]

- ・ 中・長期的な財政計画の立案
- ・ 科学研究費補助金、受託研究費等の外部資金の受け入れ状況
- ・ 消費収支計算書（事業活動収支計算書）関係比率及び貸借対照表関係比率の適切性

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、毎年度予算編成及び決算時に、新規事業計画の設定及び既存計画の実行・見直しを確認しつつ、中・長期計画表を策定しており、教育・研究、管理運営に関する短・中・長期計画の下、事業を実施している。特に収入に見合う事業計画と費用対効果を重視しつつ、収支バランスの取れた財政構造の維持に重点を置き計画を策定しており、現在は、入学定員の確保、教育・研究指導体制の強化、財政及び組織基盤のさらなる健全化、創設60周年記念事業をはじめとした教育研究の環境整備に取り組んでいる。

外部資金獲得支援のため設置した研究支援センターの運用をはじめ、外部資金獲得状況に連動した成果研究費の効果的配分及び学内研究費の活性化等、申請の拡大を図っている。

平成26年度実績は次のとおりである。

人件費比率41.9% 人件費依存率51.6% 教育研究経費比率47.1%
管理経費比率3.1% 消費支出比率108.2% 消費収支比率135.0%
学生生徒等納付金比率81.2% 補助金比率5.8% 基本金組入比率19.8%
自己資金構成比率88.5% 固定比率105.0% 固定長期適合率104.8%
流動比率143.0% 総負債比率11.5% 負債比率13.1%

2 予算編成及び予算執行は適切に行っているか。

[評価の視点]

- ・ 予算編成の適切性、執行ルールの特明性及び内部監査の適切性
- ・ 予算執行に伴う効果を分析・検証し、次年度予算につなげる仕組みの確立

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、法人本部の予算編成基本方針に基づき、学部予算編成基本方針を策定の上、編成にあたっている。決算の内部監査については、監事及び公認会計士により実施され、毎年度理事長宛に監査報告書及び意見書が提出される。

学部内の営繕管財委員会等で重要度を勘案しつつ審議し、執行部会で決定後予算執行し

ている。また、目的別に予算・決算の内訳表を作成し、各部署・委員会等において執行に対する検証を行っている。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、予算編成に伴う各予算部署との折衝において、徹底的な効果・実績の検証作業を行うことにより冗費の節減を図っている。また、施設設備に関する予算は、あらかじめ管財課に申請し、内容・工事費等を精査することで適正な予算額の計上が図られている。

さらに、学部設置の研究支援センターのサポートにより、研究活動の活性化及び科学研究費補助金、受託研究費等外部資金の安定した獲得が図られている。

2 改善すべき事項

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、中・長期的な財政計画において、大規模なキャンパス整備事業等により、消費支出比率が100%を超える状況が続いていることから、事業完了後の比率改善に向けた具体的対策への取り組みが必要である。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、本学部における現在の厳しい財政状況について、教職員に対し会議体等で説明を重ねることにより、改善への具体的取組みに対する意識が高まりつつある。

また、老朽化した施設設備の更新等、積極的な教育研究環境の整備推進が、学部評価の向上及び受験生の安定的確保の一助となっている。

基準Ⅹ 内部質保証

1. 現状の説明

1 大学の諸活動について点検・評価を行い、その結果を公表することで社会に対する説明責任を果たしているか。

[評価の視点]

- ・ 自己点検・評価の実施と結果の公表
- ・ 情報公開の内容・方法の適切性、情報公開請求への対応

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、平成23年度より学部ホームページ上に教育研究上の基礎的情報として1. 教育コンセプト，2. 教育研究上の目的，3. 学科概要，4. 専任教員数，5. 研究所等附属施設，6. 授業料等の情報を公表しており、さらに修学上の情報として、1. 学部組織，2. 教員の学位・業績，3. 入学者受入・教育課程編成・学位授与方針，4. 入学者数・収容定員・在籍者数，5. シラバス，6. 授業科目，7. 履修モデル，8. 取得可能な学位等に関する情報を公開し文科省等の情報公開請求に対応している。また、毎年、日本大学全体として取り纏める自己点検報告書の学部版を作成し、情報公開に支障の無いように努めている。現在、これらの公開情報をより見やすい内容に改定する作業を実施しているところである。

2 内部質保証に関するシステムを整備しているか。

[評価の視点]

- ・ 内部質保証の方針の策定と手続きの明確化
- ・ 内部質保証を掌る組織の整備
- ・ 自己点検・評価を改善・改革に繋げるシステムの確立
- ・ 構成員のコンプライアンス（法令・モラルの遵守）意識の徹底

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、内部質保証システムに関しては、学務委員会や11学科の学科主任で構成する自己点検・評価委員会において適宜教育研究の内部質保証に取り組んでいるところである。また構成員のコンプライアンスに関しても学部内のFD活動を通じて教職員の意識の徹底を図っているところである。

3 内部質保証システムを適切に機能させているか。

[評価の視点]

- ・ 組織レベル・個人レベルでの自己点検・評価活動の充実
- ・ 教育研究活動のデータベース化の推進
- ・ 学外者からの意見の反映

- ・ 文部科学省及び認証評価機関等からの指摘事項への対応

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

学部内にはFD委員会，自己点検・評価委員会をはじめ教育研究活動に関する様々な委員会が設置されており，これらの委員会の日常活動を通じて組織レベル・個人レベルでの自己点検・評価活動の充実・強化が図られている。教育研究活動のデータ・ベース化に関してはホームページ上の教育情報に，研究情報に関しては専任教員の研究業績をインターネット上で公表しており，適宜更新をおこなっている。また，FD活動やロールモデル活動の一環として学外の有識者や専門家を招聘して講演会や研究会を年数回開催し，それらの意見を自己点検・評価活動に反映させるよう努力している。

文部科学省，大学基準協会からの指摘事項・助言等に対しては迅速に対応するよう務めており，適宜改善が図られている（資料10-1）。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，内部質保証の一環としてフィールドサイエンス教育に重点を置いたカリキュラム（授業科目）としてフィールド実習（1年次），海外フィールド研修（2，3，4年次）を実施しているが，学内外の4つの施設（農場，演習林，臨海実験所，富士自然教育センター）で実施するフィールド実習では学生のモチベーションが高く，またグローバル化に対応して，生命農学，生命化学，獣医，動物資源，食品ビジネス，森林資源，国際開発の7学科で実施している海外フィールド研修は学生の資質向上に大きく貢献している。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

内部質保証に必要な教育研究施設等に関して，60周年記念事業の一環として2012年夏から60周年記念棟の建設及び現1，2，3号館の改築作業が進む計画であり，これらの施設が建設されることによって内部質保証を含めて本学部の教育研究活動が大きく前進することが期待されている。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，内部質保証実現に向けた取り組みのひとつとして入学者数の制限（定員の1.15倍の遵守）と入学者の偏差値の向上に関して，過去2回の入学試験において

顕著な成果が得られており、この成果をベースに内部質保証システムが円滑に機能しつつある。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、特筆すべき事項はないが敢えて挙げるとすれば、学科及び各付属施設レベルでの自己点検・評価活動の活性化である。

4. 根拠資料

10-1 学部ホームページ

教育情報 <http://www.brs.nihon-u.ac.jp/about/policy/>

研究情報 <http://www.brs.nihon-u.ac.jp/research/>

重点項目 1 修学継続支援，学修意欲の喚起

1. 現状の説明

1 学生の留年，休学及び退学の原因を把握・分析し，適切に対処しているか。

[評価の視点]

- ・ 留年者及び休・退学者の状況把握と原因分析を踏まえた対処の適切性
- ・ 留年，休学及び退学への対処について検証する仕組み

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，下級学年においては学級担任，上級学年においては学級担任及びゼミ等の指導教員が，留年，退学等の原因について状況を把握し，アドバイス等を行っている。その過程は経過報告書としてまとめられ，その適切性については事務局執行部会，執行部会，学科主任会，教授会等の会議体で審議・対処している。

2 学修相談体制を整備し，学生の学修意欲の喚起に役立てているか。

[評価の視点]

- ・ 入学時及び学期開始時のオリエンテーションにおける履修指導の実施とその適切性
- ・ オフィスアワー等をはじめとする学修相談体制とその有効性

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，新入生を対象に各種ガイダンスを開催している。履修登録ガイダンスでは，履修登録の重要性，単位認定方法，進級条件・卒業要件などについて新入生全員参加のもと，教務課直接説明している。さらに履修登録方法や GPA 制度などについてまとめた「履修ガイドブック」を作成し，新入生全員に配布している。

オフィスアワーについては，全教員が授業前後または随時対応することをシラバスで学生に周知している。

また，学習支援センターを開室しており，履修相談，教職，学芸員，奨学金，留学，就職など，幅広い相談に対応している。

3 学業成績不振の学生への支援策を講じているか。

[評価の視点]

- ・ 補習・補充教育に関する支援体制とその実施状況の適切性
- ・ 不登校の学生への対応状況

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，留年者に対する支援体制としては，学級担任や研究室指導員により，履修指導や進路相談などを行い，学修面と学生生活面でのきめ細やかな支援を実施し

ている。補習教育については、学習支援センターにおいて「生物」と「化学」の授業を入学後に実施している。

各年次の履修登録時から学級担任を中心に成績不振者に対し、履修登録未履修者への指導や不足単位数の確認を行い、追試験またはレポート課題、補講による対応を行うなどの個別対応をしている。また毎年10月に実施している父母面談において、授業の出席状況や単位修得状況を保護者に確認していただき、各学期終了前段階における卒業単位不足見込者への対策を積極的に行っている。

4 学生の修学継続，満足度向上のための関係教職員・部署間等の連携・協力体制は機能しているか。

[評価の視点]

- ・ 相談内容に即した関係部署間の連携・協力体制の整備状況

〈1〉生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では、学生による教員の授業評価について、授業アンケートを実施し、結果を数値化して、教員へフィードバックし、教員自身による評価の資料としている。さらに、多くの学科で専任教員、兼任教員及び非常勤教員を含めた教育懇談会を開催し、学生の成績から就職までの解析などを踏まえて、教育方法等について議論している。

FD活動を積極的に行っている学科においては、講義のレポートを学科教員全員でチェックするなどにより、所属教員間での学生の教学に関する事項についての共通認識が形成されている。

重点項目 2 国際交流

1. 現状の説明

1 国際交流に関する方針を明示しているか。

[評価の視点]

- ・ 国際的な教育研究交流に関する方針の明確化，その周知方法
- ・ 国際社会への連携・協力方針の明確化

(1) 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，グローバル化が加速している昨今，各種の国際交流活動を推進する必要制覇容易に理解できる。この観点から，全学生に配布する学部要覧において，留学先の候補となり得る海外提携校のリストを掲載している。

2 外国人留学生の受入れと学生の海外派遣を促進し，国際交流の推進に努めているか。

[評価の視点]

- ・ 海外学術交流協定校・提携校との交流実績
- ・ 留学を希望する学生への情報提供，外国語を学習する機会の提供
- ・ 外国人留学生に対する修学・生活・就職等各種支援体制の整備状況
- ・ 海外の大学における修得単位の認定，英語による授業科目の設置，留学を目的とする休学の取扱などの教育課程上の配慮の適切性
- ・ 日本人学生と外国留学生との交流機会の設定，交流を促進するための取組

(1) 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，当学部における教育の特性からフィールド実習が重要視される。このフィールド実習は国内のみならず海外にも「学びのフィールド」を設定し，海外の大学等の教育・研究機関と学部レベルで単位互換協定を締結している。この制度を利用した海外研修（希望者のみ）が過半数を超える学科で，下記休暇等を利用して実施している。また，受け入れ数は少ないものの協定を締結している先方の大からの短期研修の受け入れに努めている。

国際交流を推進する一助として大学院・学部等の英文パンフレットとホームページを作成している。

3 外国大学・研究機関との共同研究等を促進し，研究の質向上に努めているか。

[評価の視点]

- ・ 海外大学・研究機関との共同研究の実施状況，その成果
- ・ 海外大学・研究機関で研究に従事できる制度や機会の整備状況とその利用実績
- ・ 国際交流事業への積極的参加

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

生物資源科学部では，日本大学として締結しているものも含めて，現在11大学・研究機関と学術協定を結んでおり，共同研究や教員・学生の交流を行っている。また，現在学術協定に締結に向けて進行しているものもいくつか存在している。

また，本学には，国際交流を主たる事業とする国際地域研究所があり，共同研究等を実施するため，外国からの招へい研究者の受入れや本学研究者の外国の大学等に派遣している。さらに同研究所では，3年にわたるプロジェクト事業も展開しており，毎年1～2名の研究者の招へい・派遣が行われている。加えて，本プロジェクト事業では，最終年度に国際シンポジウムを開催し，本研究の評価をするとともに，発表や印刷物を通して社会への研究成果の還元も行っている（資料12-1）。

さらに，動物医科学研究センターでは，研究プロジェクトの一環として，海外の大学等の若手研究者を招へいして技術講習会を開催し，本学獣医学研究者のもつ高度医療技術の海外への普及に努めている。

2. 点検・評価

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

前項に記載したとおり活発な国際交流を通じて，その成果が，本学部の大学院生や学部学生教育にも還元されている。特に国際地域研究所で招へいした研究者には，「公開研究会」という形で，本学の学生に対しての研究成果の講演を義務付けしており，共同研究という側面だけではなく，教育面においても成果が上がっている。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

国際交流について，特に学術協定については，担当教員が変わると交流が無くなってしまふということがあるため，締結に関しては慎重に考えるべきである。

3. 将来に向けた発展方策

1 効果が上がっている事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

本交流で得られた成果を継続的に次世代の若手教員や学生などに繋げていく工夫が必要であると考えている。

2 改善すべき事項

〈1〉 生物資源科学部，生物資源科学研究科，獣医学研究科

「1 効果が上がっている事項」でも記載したとおり，国際交流は継続性が重要であると
考えられるため，いかに次世代に繋げていくかが重要である。

4. 根拠資料

12-1 国際地域研究所事業募集要項